

『恵方の富士』翻刻と解題

稲葉 有祐

解題

本稿では元禄期から宝暦期にかけて息の長い活動を展開し、確固たる地位を築いた立羽^{たちば}不角（寛文二年～宝暦三年）の長男、不局^{ふけい}（元禄十四年～？）の元文五年歳旦集『恵方の富士』（架蔵）を翻刻・紹介し、江戸俳壇の一樣相を考察する礎^{いし}としたい。

解題を記すにあたり、まず、不角の経歴^{けいれき}について述べておく。不角は延宝二年に十三歳で不卜に入門、遠山と号したとされ（『続清鮑』延享二年刊）、調和編『俳諧題林一句』（天和三年刊）から句が確認される。「我宿は平松町の南側／書籍の外に俳諧も売ル」（『二息』元禄六年刊）と自ら述べるように、書肆を営み、『色の染衣』（貞享四年刊）・『好色染下地』（元禄四年刊）・『華染分』（同五年頃成）といった浮世草子や地誌『江戸惣鹿子』（同二年成）等、多方面に亘る著述も試みている。元禄三年には前句付の月次興行を開始して

前句付高点付句集『二葉の松』を出版、以後も宝永三年まで自家版の高点集を続刊し、その普及に大いに貢献する。高点には奇矯な題材の句を採るといった撰句の特徴があり、江戸前句付界を牽引する存在であった。

宝永期には古語を利用した古典的趣味の「温故知新流」（『箋籙輪』宝永四年序）を標榜して江戸俳壇主流の洒落風に対抗、他門から「化鳥風」と誹謗されながらも、「奥すじの客をよふたらさんす」（『花見車』元禄十五年刊）と、特に東北地方に多く門流を擁^{もつ}した。享保四年には「正風体」（『正風集』同年以前成）を宣言し、同十二年には「門弟数千人に及」（『続清鮑』）んだことから千翁を名乗るようになる。享保期に上方で一世を風靡した淡々や『武玉川』（寛延三年刊）の大ヒットを飛ばした紀逸らは一時期不角の指導下にあり、文角こと浮世絵師の奥村政信も門弟の一人であった。また、備角（備前岡山藩主、池田綱政）をはじめ、門下には江戸在勤の武家が多数おり、元禄十六年、師不卜十三回忌に剃髪した際には備角らの後援

で法橋を勅許されている（後、享保十五年に法眼となる）。

不角には息子が六人、娘が一人おり（「予も七子有り。男六人女子一人」『八十公』寛保元年刊）、それぞれ長女妙船・長男不局・次男玲角・三男寿角・四男辰角・五男千虎・六男勝角と号して俳諧を嗜み、歳旦集『享保十二丁未歳旦』には後妻の妙龜と六男一女が揃って参加する等、不角を中心に一族で文芸圈を形成する。内、不局・寿角は俳諧師となり、「今以流儀かはらず。息不局・寿角の三士、益一流を立て、他の誹風にか、はらざる也」（『鳥山彦』享保二十一年刊）と、他門とは一線を画しつつ活動していく。

本資料の編者不局は、はじめ了角・泰角と号し、正徳四年の不角歳旦集『雑煮枕』に「^{〔法橋〕}了角」として入集、先の『享保十二丁未歳旦』には「例年泰角も引付出候」と紹介される。享保十三年頃に『俳諧孿生のうらなし』を刊行し、翌十四年より不局と改める。別号、安月堂・梅林斎・楽生堂・友柳軒・西湖亭・玉壺亭・松月庵。

『綾錦』（同十七年刊）掲載の系譜に弟寿角とともに名が挙がっており、享保十七年には江戸の俳諧師として認知されていたことが分かる。『綾錦』には批点用の点印として「無尽宝^{〔雅号〕} 天高月^{〔字〕} 化玉^{〔号〕} 神龍^{〔十四〕} 秀光^{〔十三〕} 華徳^{〔十二〕} 有隣^{〔十一〕} 文戔^{〔十〕} 蛭雪^{〔九〕} 枕書^{〔八〕} 鶏窓^{〔七〕} 順六^{〔六〕} 楽五^{〔五〕} 好四^{〔四〕} 朱三^{〔三〕} 長二^{〔二〕}」が掲出される。月次興行も主催している。^{〔三〕}

以下、安田吉人氏の調査をもとに述べると、翌十八年に歳旦集『富の門』を出版、以後も『宝舟』（同十九年刊）・『節小袖』（元文三年

刊）・『か、み餅』（同四年刊）・『恵方の富士』（同五年刊）・『玉簪』（寛保二年刊）・『誹諧音羽の瀧』（延享元年刊）・『松竹梅』（同四年刊）・『初日影』（宝暦二年刊）・『たからの玉』（同四年刊）・『三笠山』（明和二年刊）・『家の栄』（同四年刊）・『初日影』（同七年刊）・『養老の瀧』（安永三年刊）・『福の神』（同五年刊）と歳旦集を精力的に刊行する。

寛保元年には、寿角との共編で不角の八十賀集『八十公』を上梓、同年五月に、扇雪堂不清に伝授した伝書『秘書』（東京大学総合図書館酒竹文庫蔵）を認める。宝暦三年の不角物故に際しては寿角と共編で追善集『うつ蟬』^{〔五〕}を刊行、生前より「兄弟離れぬやうに、別て不局・寿角は俳道を業とせば、心を合せ、正風繁昌になす事、孝の至り也」（同書）と論されていたことを明かし、不局・寿角各人はそれぞれ俳諧の家督と家業とを継ぐ。^{〔六〕}その後、不局は絵入発句集『四選ふうし集』（宝暦十三年刊）を刊行している。

では、以下に『恵方の富士』の書誌を記す。

装幀	刊本。半紙本一冊。楮紙。
表紙	薄茶色。無地。二十一・九糎×十五・三糎。
題簽	左肩原单边題簽「恵方の富士」（陰刻刷）。
丁数	全二十三丁（丁付「一」〜「二十三」）。
見返し	なし。
内題	「恵方富士」（序文）。

匡郭 四周单边。十五・五種×十三・一種。短冊等に句を記した

ように見立てた飾り枠（七ウ・八オ）、卷子に句を記したように見立てた飾り枠（十四ウ・十五オ、十九ウ・二十ウ、二十三オ）がある。

挿画 「保高書」。「左右無印ハ松千堂主画之」。全二十八画。（二

オ・四ウ、五ウ・七オ、八ウ・十二オ、十三ウ、十五ウ・十八オ、十九オ、二十一ウ、二十三ウ）。

序文 不局自序。「元文五庚申歲旦 自序」。

跋文 なし。

刊記 なし。

印記 「埴原藏書」（一オ）。

備考 序文（一オ・ウ）、二十三オは陰刻。また、十九ウ・二十

オ・二十ウに陰刻部分がある。底本のほか、大阪女子大学に所蔵がある。

不角らの歳旦集は基本的に絵入で、『恵方の富士』同様、飾り枠の使用も見られる。⁽⁷⁾「左右無印ハ松千堂主画之」（二十二ウ）とあるように、本資料の挿絵の多くは寿角の手になる。連衆には、小見川町（現・千葉県香取市）や信州飯田の俳連に加え、「万亀堂家士」・「千川家士」・「不倦家士」・「上州館林組千栄家士」といった記述から、多くの武家が参加していることが分かる。試みに『音羽の瀧』（富山県立図書館志田文庫蔵）の志田義秀氏による書き入れの中か

ら、本資料に入集する者を抜き出すと、以下の通りになる。

善角	長田庄次郎
葉角	大久保弥三郎
賀角	吉田政右衛門
簗角	池田内匠頭
敲角	加藤織部正
止角	三宅周防守
伍角	桜井玄東
隣角	小川東水
左角	秋元
千栄	津軽式部
嬋角	水野要
風揚	木下定右衛門
千鶴	松平備前守
千川	横山内記
春角	井関忠左衛門
鈴角	横山軈負
鶏角	金子平左衛門
揚角	川勝左京
不越	山品節左衛門

右によると、万亀堂（千鶴）は上総大多喜藩主の松平正貞、千川は旗本の横山清章、千栄は元文四年から館林城在番であった津輕寿世（弘前藩黒石領主）で、不倦は明らかでないが、他に岡山藩の支藩である備中鴨方藩主の池田政倚（箋角）、大洲藩の支藩である新谷藩主の加藤泰広（敲角）らが名を連ねている。葉角（大久保忠恒）、止角（三宅康俱）、揚角（川勝広當）らも旗本で、鈴角は千栄の弟、賀忠と考えられる。不局の歳旦集について、「形式は不角歳旦集と同様で歳旦三つ物・付合・発句・歳暮発句からなる。入集者も父の門葉を継承する」との安田氏の指摘があるように、大名貴顕との結び付きも不角から受け継いだものと捉えることが出来る。

また、千翁（不角）と妙亀、妙船・玲角・寿角・辰角・千虎・勝角（元角）らの兄弟が入集するのに加え、不局妻（梅鶯・玉水・玉泉）、娘のてる・志津の句が見える。妻・娘の間に配置される梅笑は恐らく長男の不荃（梅之助）のことであろう。次男不龍（不賢・不嫌）は入集しないが、『恵方の富士』からは不角一族の拡充と結束が認められる。

注

- (1) 不角の活動については安田吉人氏「立羽不角年譜稿 一」『調布学園女子短期大学紀要』第三十号、一九九八年三月、「同 二」『調布日本文化』第十号、二〇〇〇年三月、「同 三」『調布日本文化』第十二号、二〇〇二年三月、「同（終）」『成城国文学』第二十六号、二〇一〇年三月に詳しい。

- (2) 安田吉人「不角前句付考」『成城国文学』第四号、一九八八年三月。

- (3) 『宝舟』巻末の「年中引附覚」には「初午^{正月} 上巳^{二月} 花桜^{三月} 時鳥^并更衣^{四月} 端午^{五月} 涼夏^{六月} 季何^{七月} 七夕^{八月} 盆^{九月} 名月^{十月} 菊^并十三夜^{十一月} 落葉^{十二月} 冬何^{正月} ても^{二月} 十五^{三月} 日^{四月} 靈^{五月} 十^{六月} 日^{七月} 迄奉待候」と季題及び締め切りが記される。

- (4) (1) 中、安田氏「立羽不角年譜稿（終）」を参照。

- (5) 『うつ蟬』の下巻と推定される『蟬の声（仮題）』のみ現存。同書は平島順子氏「『蟬の声（仮題）』翻刻と解題―不角の追善集」『文献探究』第三十四号、一九九六年に翻刻が備わる。

- (6) 寿角編『蓬萊山（宝暦四年刊）』所収、忻角の「今年から二ヶ葉の松や門飾」句の前書に「松月堂俳諧の家督ハ梅林斎に譲リ、居宅ハ松千堂にゆづられければ」とある。『たからの玉』（同年刊）には「不肖、去年父の点印をゆづらる、事」序文、「松月堂の家督をゆづられ始ての春、点印をも改められ」（首尾の吟前書）等とあり、不局は宝暦三年に点印を付嘱している。また、平島順子氏「『俳諧とんと』翻刻と解題―不角に対する論難書」『雅俗』第三号、一九九六年は書肆を寿角が継いだとする。
- (7) 『蓬萊山』巻末の「年中引附之覚」には「歳旦・歳暮、御句極月中旬迄、不局方へも拙者方へも不相易奉待候。松千堂寿角」とあり、両者はお互い提携し合いながら運営していたと見える。
- (8) (1) 中、安田氏「立羽不角年譜稿（終）」及び牧藍子氏「享保期の不角の月次興行の性格」（『国語と国文学』第九十巻九号、二〇一三年八月）。

- (9) (1) 中、安田氏「立羽不角年譜稿（終）」。
- (9) 不荃も俳諧師として活動し、歳旦集『山の井』（明和四年刊）・

『親子鶴』（同六年刊）・『千歳のみどり』（同八年刊）・『若泉』（安永六年刊）を出版している。（1）中、安田氏「立羽不角年譜稿（終）」参照。

※本稿は科学研究費助成事業（基盤研究（C）・19K00332・代表中嶋隆）の成果の一部である。

（いなば ゆうすけ 和光大学准教授）

【凡例】

- 一、底本には架蔵本を用いた。
- 一、旧字及び異体字等は適宜通行の字体に改めた。
- 一、文字の清濁は原文通りとした。
- 一、振り仮名はすべて原本通りとした。
- 一、本文には句読点はないが、これを私に補った。
- 一、虫損で判読できない文字は□で示した。
- 一、誤記と見られる箇所（ママ）を付した。
- 一、丁移りは、その丁の表及び裏の末尾において「」を付し、丁数とオ・ウとを括弧内に示すことによってあらわした。
- 一、挿絵・飾り枠は末尾に【図版】として掲出した。

【翻刻】

夫、人之君タルハ、心を正し以朝廷を正し、朝廷を正し以百官

を正、百官を正以正三万民、万民を正し以四方を正、四方を正し以遠近正に毫ならづといふ事なし。月も正に至、戸さ、ぬ御代の春、門には常盤の松飾、軒には長々つたはる注連縄を正木のかつらとことぶき、年神も邪見の家小店がりせず、庭の梅も笑ひをなし、人もにこ／＼心寛に曲れる事なきも、上に仁風有かうへ也。太平の世には「ニオ生を樂し□□生を樂しむ事、衣食住のミなくては、樂しミかたし。學子去年居を替て蚊屋新しく、容レ膝安く、ひだるく寒からず、煩はしき事なし。其樂の余に元旦の吟を集む。かはらす衆方より給ふ事、忝し。彼山申西の間に当れば、祝て愚吟をなし、編名恵方富士ト云尔。

元文五庚申歲旦 自序 立羽之印 不局 不（一ウ）

我庵も豊や恵方に穀聚山 樂生堂 不局

笑ふ門には福藁の風 千丈

師道様と百轉りにはやされて 忻角（二オ）

算シ始ニッからこそ白鼠 枝月堂 葉角

包む年玉大黒屋銀 賀角

此春は乳もいろはも止メさせて 千丈（二ウ）

御代の春鶴の餌蒔や林和靖 寿月堂 善角

東方朔か算木置初 忻角

伸ル眉長寿の相の麗に 賀角（三オ）

日を木賊月を掠の葉玉の春 一可堂 千丈

琥珀の照りを臙無^キ星

嬋角

汲霞通辞に何歟時宜いふて

善角「(三ウ)

ゆいぞめも田舎は有らて馬の髪

明月堂 忻角

粃^{モミ}は扱^{コカ}れて福の字が附

善角

室くと言しも只の梅咲かて

葉角「(四オ)

久かたの月は八日を弓始

柳々堂 嬋角

宵^{ヨベ}の白馬に祝ふ朝粥

葉角

篝^{カ、リ}消えて衛士は余寒や知ぬらん

不局「(四ウ)

御新宅の春を賀して

千代の苔^{ムシ}茂初種や初手水

化獸堂 賀角

築山の岩黒^イかち栗

不局

づいくと霞刷毛目のたなひきて

嬋角

是より句順任遅速もの也。

まづ鶴の初声ぞ聞車井戸

万岳堂 千川

門に亀の尾見^ル飾藁

鶏角

浪静安房迄くつと霞せて

春角

初鶏や言葉の花の三番叟

懸衆堂 鈴角

鳴ルは手桶へ若水の瀧

春角

清剃の上を柳か又撫て

冶霜「(五オ)

寿の歩^{コトフキ}ミはしめや鶴の足

備前住紡績堂 隻角

南極星変じ髭飾藁

不局

伝内か手妻に梅の花咲て

千翁「(五ウ)

大判と熨斗と鏡餅や同し肌

淡月堂 止角

止^ル角ニ恵方から福

不局

ちよつと来て一枚握り花咲て

千丈「(六オ)

初霞富士へ産る、日の太郎

推月堂 敲角

歩^{ア、シヨ}は上手麗雲脚

不局

空に紛ふ海原に帆を風と見て

寿角「(六ウ)

一年計^{ノ、ハ}在ニ陽春一

懸想文では、笑顔を御慶かな

万亀堂 千鶴

彈初さゆる鶯の眉

千雀

盃の廻る陽気がそ、らせて

素後「(七オ)

其二

寿や今朝起初の福寿草

万亀堂素後

井花水にて若やきしかほ

虎休

能日和鳳巾も御伝も腰のして

千雀

其三

門の欠^ビ鶴の声有^リ千代の春

同千雀

足て七種た、く六尺

五雲

いさきよくふり出す奴いとゆふに

虎休「(七ウ)

其四

先君へ鰯の翁か御慶かな

同虎休

松に氣力をあた、かな風

千鶴

洋か雪麗に心も綿ぬきて

五雲

其五

小笠原舞ふ蝶屠蘇の長柄哉

同五雲

麗帆懸の肩衣の栄

素後

ハアイハウ 皺面使者も春めきて

千鶴〔八オ〕

天窓に豊の貢めてたや五十の春

万水堂 亀角

和田にも負ぬ一家数の子

伍角

霞汲やら門前の賑やかに

荊角〔八ウ〕

子孫繁栄を年の賀によせて

遊月堂 保角

六十の春子共に腰を老の坂

不局

齒朶と祝くたれた御眉

隣角〔九オ〕

霞には鶴の羽風や晴すらん

館林御城にて春を迎

花王堂 千栄

君か春幾万代の尾曳城

不局

曇らぬ政務祝ふ御鏡鑑

析角〔九ウ〕

汲霞鶏上戸 驚かて

九月堂 左角

致障敷いづミきならじ三日の腹

涌て流る、御福茶の釜

封竜窟 仙角

鶴の紋亀綾万年あたゝかに〔十オ〕

扱も春千代の響や松の風

析角

年始の時服高砂の終

角上改動学堂 不倦

媚より白い若餅の肌

不局

公家客に吾妻台処舞雲雀

蓋鏡〔十一オ〕

我庵は喰つミ台を仙の春

枝掃堂 鵬角

松からのさりいね上ル鶴

析角

熊坂か居ぬ代往来もぬくとげに

不局〔十一ウ〕

六甲を出て若水も産湯とぞ

僅志

今朝喰初の齒固に石

不局

山笑ふ風情も広く人和て

冬青〔十二オ〕

面白の岩戸も斯や初日の出

千川家士開閑堂 鶏角

先養老を父へ酌ム屠蘇

同

梅椿福寿交に莞尔て

同

時を得て蟠竜の伸に福寿草

不磷

飾に高く藁の昇進

不局

汲霞弾つ語つ家富て

千丈

立春

春立や氷かもどる浪の花

千色齋 敲角

子日

けふ子日算て曳や七の松

同

節分

喰てげりおに一口に除夜の豆

同〔十二ウ〕

東井や水の封切る初旦

雪月堂 豊角

又五十年今朝や慮生か夢初

凹路堂 凸角

鋤の柄に袞龍縹ふ旦哉

三芳野も霞につゞく今朝の慶

松竹の対の道具や飾杭

試の文字を芳すや筆へ花

初手水耳から先ぞ瀧の音

若水にたえすとふたり日の泉

投入は床其開付かさり松

いとはやも梅芳しき旦哉

恵かけ得たり雑煮の福生菓

聖代の門や飾の鳳尾草

田中

聞初と曆にはなし鶏の声

万代も天の戸さゝで御代の春

人心梅の笑顔や明の春

去年はけり扱も其後初日の出

天の戸を明^ル障子や初日の出

蓬萊の木の実に富^{トモ}り年の猿

門松の食唐人の風情哉

御飾の竹も直也君千年

梅か香に格別今朝の鼻若し

御代なれや夜も不^レ局松の門

友柳軒主へ御慶

新月堂 温角

瑞花堂 木雪

不徳家土 深雪

同 蓋鏡

同 風揚

同 橘舎

同 冬青

同 只旦

柳原 佐亀

篋月堂 線角「(十三才)」

遊燕堂 柳水

冒門堂 市角

濤角息松影堂 濤磯

常盤舎 松翠

車楽斎 風也

方円器 養水

孟童斎 雲角

童水軒 不怠

忍班閑舎 扇之

同浮水斎 柳亀

不^ス局や御代の□□門飾

鶏鐘も初曉の宝かな

初日ても人はやつはり去年の人

温厚のほや／＼なれや初日の出

衣食住祝ひ始や明の春

式台に年礼や續其開帳

武蔵野や先蓬萊に日の始

梅を妻和靖には何水祝^{ナド}

初旦笑かほはせや福寿相

回文

永日の小松を妻^{ツマ}子野曳かな

喰積や我^カ福祿と祝ふ米

万代や三番惣領千年梅

去年の疎意負て貰ふて御慶哉

元旦 小見川連一

酒を造らせて家業とすれば

汲ど尽ぬ泉もどきや家の屠蘇

御連中へ歳旦帳の御慶かな

ほんのりと気も若^{ヤス}榮つ今朝の春

大舟に乗た心や御代の春

緩^{ユル}む気は貧福同し年の朝

昼の萱夜の縄もなし今朝の春

瀬^ノト氏 対鏡「(十三ウ)」

三州今川村 勇月堂 智角

森々堂 片里

一甫齋 卯角

梅香軒 可興

涼月堂 扇車

肥後 青髭

有月堂 隣角

増山氏 不穿

麟林堂 司角

後藤氏 巨英

松風堂 琴角

中山氏 逸覚「(十四才)」

宝安堂 不越

心定堂 止越

後秀堂 喜榮

早梅堂 春志

小堤氏 有志

鈴木氏 旦夕

先日屠蘇と御慶や勇ミ顔
四方は恐三方拝と親三人

阿蘇氏 時合
深川住實壽堂 恰角

小見川連二

読初や同音に啼ホウホケキヨ

延命山 雨夕（十四ウ）

門松に鶴や羽を伸飾藁

和友堂 不堅

松竹の花表を見たり初旦

暉月堂 故井

元文の五年を豊の梅の花

高冷堂 籠口

富は屋の実生を得たり福寿草

季月堂 幸迎

初日まつ心は夢も不老門

汀報堂 蘆笛

影移ル鶴とばあく初手水

流水堂 淳志

酔た屠蘇赤き面も申の今朝

亀崎氏 勇志

一に万先元朝の笑ひがほ

止善堂 喜胎

去年御門葉に入、改旦へ表徳を始めて

師の恩の真砂の数を筆始

守中堂 警角（十五オ）

天地の初糸イゆふを山かつら

冷月堂 千慮

石公か威す馬で年礼

不扇

門シギリ、明ケて蛙の形見せて

不弄（十五ウ）

陽に向ふ鶏鳴の一声、天の戸出る光のはやしかた、霞の

幕の長閑さ、御慶くも戸毎の礼義

ヒイヤヒイ海を舞台の初日影

百陽堂 松花

生ハエたる苔は岩の節衣

鵬角

十たび華を見んと小松の手入して

不扇（十六オ）

神代も斯あらん、うるはしき日の御恵、四ツの民、何レ
水洩る、事有ん。

六合の内照り運カけり初日影

工船堂 揚角（十六ウ）

鶯や今朝より声も改り

皖玉堂 不石

鶴と鶯の人も足どり下馬の春

保高書（印）（十七オ）

か、ミ餅まことに御代の姿哉

梧角息 梧川（十七ウ）

君子の徳を見する門松

千尋堂 虎道

答ドレイくく遅日に眠るひまなくて

不枉

人生時雖ト以ニ仁儀礼智性ノ、於ニ欲レ心処ニ有二邪正一。

不扇（十八オ）

直走を我も競ん梅柳

赤坂住 只角

羽二重摺の戦ぐ春風

千丈

懷フトコロ医六枚肩て百千鳥

法眼

足袋履て地者に戻ル旦哉

蝨月堂 説角

年の尾も一夜明ば日のかしら

総角

豊年や筒から粥のかくや姫

山寿齋 恵角

神業の甘棠うたへ日の始

雛鶴齋 千如

豊年の証拠に洩ぬ藁盒子

睦宜齋 弟角

勿鉢と成横雲の初日かな

仙鹿堂 倚角

毎に良コト風ヨシつ四方の空

竹林齋 不迫（十八ウ）

日の始曇もあらず豊かな

勝月堂 最角

蓬萊に名もおもしろしほんだはら

小石川 朝武

先祝ふ飾や年の棚つ物

千陽斎 桃笑

立初る霞産衣に日の太郎

蘭香堂 秀角

植込の常盤やつく門飾

玉扇堂 一風

丹頂の朱を増しなん初日の出

上州館林千栄家士高月堂 猿志〔十九才〕

信州飯田俳連

御代なれや山家も都初日影

長林堂 栄松

年日明明德

柳月堂 斜角

颯々の謡初也門飾

直月堂 教角

明て目も一入笑を福寿草

至月堂 孝角

盃を預てまはる御慶かな

巴月堂 水角

顔の皺に火のし心や初日の出

蓬菜は手近き山の笑哉

是ヨリ南月堂クミ 南枝

古いかほも若やきけりな初手水

南耕

鰕是門松鱸

花席

飾竹猶二花表

波龍〔十九ウ〕

紅は屠蘇に苔つ花の春

東鶴

門松の精かも内の諸白髪

初入

明て猶葉色けたかし松飾

南旭

飾る、鰕は魚類の美髯公

好松

春は色に出ス橙のおやぢかな

梅童

売始誠二其意

嘯吹

両の手に旨物也福寿草

杜水

門口も前歯染けり飾炭

松山

父満八十而諸根強健如昔

喰つミや八そちの歯にも堅米

南月堂 無角

狸々の出端の歩行そ初日脚

ヒゴ白沢庵 納角〔二十才〕

上州館林組千栄家士

初鶏ハ智恵の礫や去年の壺

雪中堂 筍角

長閑也枝も鳴さぬ館林

賞月齋 桂角

珍しや霞城に君とたまの春

鸞月堂 隱角

明初る右の手軽き曆かな

白仙堂 些雪

大福に実を吞得たり今朝の春

分月堂 志州

鈍なから舌を出しけり屠蘇袋

雲竜堂 成角

表紙刻て申そ生る、初曆

楽文堂 花友

ゆつたりと鶴か舞出初日哉

可楽堂 可笑

行年の顔にも負じ屠蘇機嫌

家士ノ外 百川

直は竹に齡は松に門飾

同調巴

神主も鎌をしまへば明の春

鮎雲斎 珍角〔二十ウ〕

年尾

春の字を客とやいはん煤払ひ

篋角

扱もけふに羊の歩ミ年昏ぬ

敲角

足にまかせて

懸取や羊の歩ミ隙のなき

左角

節分に忘れじ牛に角は有レど

析角

井戸側のかはく間もなし年の昏

仙角

常闇トコの除夜を嘶や神楽獅子

石原住不倦

煤竹も富の瑞有り布袋草

善角

梅は咲ど天下の春は明日アシタから

僅志

年の市春待チ顔の足袋直段ねかな

桃笑

取込は富のもと也大卅日

松鶴堂千々（二十一オ）

諸人の難義を救ふためには、小米ほしや／＼と瀬川菊之

丞かせりふの心にも成へし。義にせまりては指を切事は

易く、愚案工夫にも金を求める事ハかたし。あゝまゝよ、

蛙の地獄に墮とも、此節なれば

撞ツクへき歟無間の鐘をとしの昏

吉田氏賀角（二十一ウ）

賑ひにけりの溜りを煤ススひ

深川村木町怡角

恥かしや犬馬と共に年昏ぬ

不局

龔舎蝶の行跡を見て、仕官は人の羅網也として、終に退ッ

時の人、是を呼てしかいふ。

歳来へき宵も閑に蜘蛛隠

松千堂寿角

元旦

爪取て苦をは齋にゆつりけり

婢角母

水と共に心も清し初うがい

しほ

打懸に金糸キンシの照や初日の出

ミほ

買得たり福を枕に宝舟

もん

日の太郎初横雲や岩田帯

仰聖堂局学（二十二オ）

上下のひれに倍せり初日影

瑞雲斎麒麟角

正サ木薫ル墨梅なれや初日影

京都北野旅客久松能及

旧冬、雀の舞込たるをいたはりて

楊宝に放つ雀に玉の春

先々堂瑠角

釘にふらりいねつむ今朝の箒かな

松千堂寿角

難波津にてうど今年て三の春

己上堂辰角

悪魔なし納ル手には福寿草

千虎

書初の文シもかはらず千代や千代

元角

打かけの裾ては塵を掃初ぬ

不局妻

嗽水手の窪やせる初日影

梅笑

祝へ／＼白銀町の年始客

てる

いそかしや毬ハネと羽ハネとに隙もなし

しつ

左右無印ハ松千堂主画之（二十二ウ）

改旦

もとへ戻ル戸は戸袋へ明の春

法眼不角

名に慶ユキて御物師祝へはりさい女

同妻

去秋根分次第／＼に富貴草

同娘妙船

牛計師走の市にいくぢなし

法眼

子々万々（二十三オ）

御目出たく下もめてたくて君か春

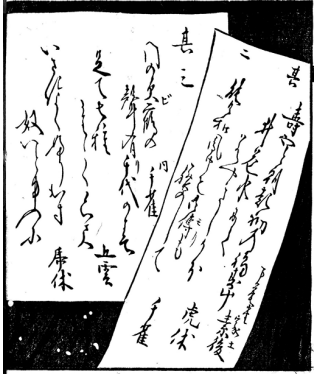
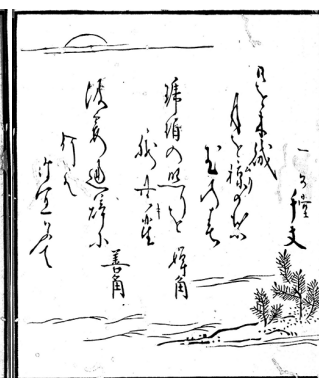
蘆江堂千泉

幸イ木積民の竈カマド前

千翁

がたり／＼たえず春屋に呂をなして

不局（二十三ウ）



※右上より横に二オ・二ウ・三オ・三ウ・四オ・四ウ・五ウ・六オ・六ウ・七オ・七ウ・八オ。

※右上より横に八ウ・九オ・九ウ・十オ・十ウ・十一オ・十一ウ・十二オ・十三ウ・十四ウ・十五オ・十五ウ。

